

平成29年度 小平市立第三中学校 学校評価報告書

学校教育目標

健康「ゆたかな心、たくましいからだ」、実践「進んで学び、積極性を養う」、協力「ひとりはおみんなのために みんなはひとりのために」

目指す学校像(ビジョン)

- 【目指す学校像】 自らの能力を高め活用し、これからの社会に貢献できる人材を輩出する学校
- 【目指す児童・生徒像】 進んで学び、思いやりのある心身ともに健康な子ども
- 【目指す教師像】 教育公務員としての使命と自覚をもち、意欲的に業務に携わることのできる教師

前年度までの学校経営上の成果と課題

- 成果: ICT機器利用の推進 ・落ち着いた学校生活 ・生徒専門委員会活動の活性化
 課題: 学力向上 ・特別支援教育の充実 ・組織力向上

	具体的方策	第1回評価		課題と対策	第2回評価		学校関係者評価	課題と次年度以降の対策
		努力目標	成果目標		努力目標	成果目標		
学力向上	都ICT支援事業指定校としてICT機器の活用と学習形態及び指導方法の工夫改善を進める。	4	4	前年度から継続して研究を継続した。年度前半までの研究指定なので前期で機器は返却となる。その後の機器活用が課題である。	4	4	・生徒達が集中して授業に取り組んでいる。指導者の方をしっかりと向いている。 ・安心して授業を見ることができるが、ふり返りの活動が不十分なのが気になる。改善が望まれる。 ・掲示してある作品や制作物がどれも丁寧できちんと取り組んでいる。教員の指導力がわかる。 ・教員の編成やバランスについてよく配慮されている。	東京都ICT支援事業指定校としての取組をきっかけにICT機器を利用が進んだ。学校配当予算の中でデジタル教科書を順番に購入するなどの整備をすすめることが課題である。
	年間2回の授業研究と相互授業参観週間を設定し、他教員の授業参観を2回以上行う。	2	4	空き時間の関係から相互授業参観への参加数が伸びない。引き続き参観を促す。	2	4	・生徒がとてもよい状態。よくするために必要な条件が満たされている。 ・あいさつがきちんとでき、服装の乱れなどもなく、きちんとしている。多くの人にこの状況を知ってもらいたい。 ・言葉遣いが心配。親や教員の言葉遣いや語彙力にも課題がある。 ・地域社会の環境等を良くしていこうという生徒になってほしい。 ・「いじめ」の見落としのないよう、重大な事故にならないよう取り組んでほしい。	第1回評価時は、相互授業参観週間1回目だったので努力目標評価は2となった。しかし、空き時間や業務の関係で3年生の教員を中心に参観回数が少なかった。評価目標の見直しが課題である。経営目標と具体的取組について見直しが必要である。
健全育成	「さわやかコミュニティプロジェクト」や「福祉体験授業」を道徳教育の実践活動に位置づけ、思いやりの心を育む。	/	/	この時点では未実施	4	4	・特別支援の方法や不登校の対応は大変だが継続してほしい。 ・教員が辛抱強く神経を使いながら大変な取組をしていることに頭が下がる。	今年度は全校生徒を対象に道徳授業地区公開講座で、ハンセン病資料館学芸員による講演を実施した。3年生は、福祉協議会と連携した「福祉体験」を実施している。その経験を通し、障がい者に対する理解を深めることができた。今後は、地域防災等の取組を進め、生徒の自己有用感を高める。
	行事や委員会活動での生徒の主体的な取組を促し、成就感を味わわせると共に「いじめ撲滅」の取組など生徒会活動の充実を図る。	4	4	生徒会朝礼は月1回開催できている。今年度は担当者が特別活動全国大会に出席、生徒会指導力の向上を図った。いじめ撲滅の取組は今一歩である。	4	4	・特別支援学級の生徒指導は個別対応が多く教員の負担が大きいのではない。 ・開かれた学校に十分なっている。 ・2年生の「職場体験新聞」などを丁寧にまとめた。職場体験場所として指導に関わった。新聞を通して礼儀正しい生徒達だったことを思い出した。 ・質問教室や地域未来塾などに顔を出す教員が多くなった。生徒も喜んでいる。友達感覚で先生と接する生徒が気になるのでその点は指導していきたい。	福祉協議会と連携した「福祉体験」を実施している。その経験を通し、障がい者に対する理解を深めることができた。今後は、地域防災等の取組を進め、生徒の自己有用感を高める。 生徒会朝礼は月1回定例開催した。募金活動や愛の光運動などの取組を継続している。体育委員会などを中心に専門委員会の活動は活発になってきた。
特別支援教育	特別支援コーディネーターを中心とした校内委員会を週1回行い生徒の支援策について共通理解を図るとともに、全職員に周知する。	4	4	昨年まで隔週1回開催であった特別支援校内委員会を毎週開催とした。生徒に対して担任等が家庭と十分連携がとれていないこともあった。	4	4	・特別支援の方法や不登校の対応は大変だが継続してほしい。 ・教員が辛抱強く神経を使いながら大変な取組をしていることに頭が下がる。	S.C.やS.S.W.のみならず外部機関とも積極的に連携をとった。不登校生徒の数が毎年増加している。登校してきても教室には入れない生徒の支援方法について、教員の合意形成を進めた。連絡が難しい家庭が多いことが課題である。
	通常学級の特別活動で特別支援学級教員による障害理解教育を実施し、相互理解を深める。	3	3	8組とは運動会で1年生の学年競技参加を通して交流を行った。1年生全クラスで、特別支援学級担当教員から学級の生徒の特性や配慮事項について指導した。他の学年での実施が課題である。	3	3	・特別支援学級の生徒指導は個別対応が多く教員の負担が大きいのではない。 ・開かれた学校に十分なっている。 ・2年生の「職場体験新聞」などを丁寧にまとめた。職場体験場所として指導に関わった。新聞を通して礼儀正しい生徒達だったことを思い出した。 ・質問教室や地域未来塾などに顔を出す教員が多くなった。生徒も喜んでいる。友達感覚で先生と接する生徒が気になるのでその点は指導していきたい。	生徒同士の十分な交流は慎重に行った。特別支援学級教員が通常の学級で特別支援教育について理解を深める授業を実施した。2・3年では実施できなかった。次年度も生徒の特性を見極めた上で相互理解を深める場面を意図的につくっていく。
開かれた学校	ホームページとブログページを定期的に更新し、学校の様子をわかりやすく保護者に伝える	3	4	学校のお知らせページ(ブログページ)を活用し、情報を積極的に発信した。前期では10,000アクセスを超えなかった。	4	4	・開かれた学校に十分なっている。 ・2年生の「職場体験新聞」などを丁寧にまとめた。職場体験場所として指導に関わった。新聞を通して礼儀正しい生徒達だったことを思い出した。 ・質問教室や地域未来塾などに顔を出す教員が多くなった。生徒も喜んでいる。友達感覚で先生と接する生徒が気になるのでその点は指導していきたい。	新しいお知らせページを使い、情報を積極的に発信した。教員からの積極的な発信が多くなり、年度末までに15,000アクセスを超えた。従来のホームページの更新が進んでいないことが課題。写真等を入れ替える。
	学校支援コーディネータ及び学校支援ボランティアと協力し、地域未来塾やボランティア養成講座を定期的に開催する。	1	4	地域未来塾実施に向けて具体的な運営方法や指導者の募集などを進めた。開催は前期中盤からとなった。当初参加生徒は少なかった。生徒や保護者への周知が課題。	3	4	・開かれた学校に十分なっている。 ・2年生の「職場体験新聞」などを丁寧にまとめた。職場体験場所として指導に関わった。新聞を通して礼儀正しい生徒達だったことを思い出した。 ・質問教室や地域未来塾などに顔を出す教員が多くなった。生徒も喜んでいる。友達感覚で先生と接する生徒が気になるのでその点は指導していきたい。	学校支援コーディネータや小平市福祉協議会C.S.W.と協力し、地域未来塾実施に向けて具体的な運営方法や指導者の募集などを進めた。当初参加生徒は少なかったが、教員からの声かけで30名もの生徒が集まった。次年度以降の指導者の確保が課題である。